

葉は互生、無柄、披針形、疎に微鋸齒あり、稍革質にして上面光澤あり、両面には多少の腺点を有す；托葉は披針形、葉柄や花序と共に星狀腺毛及び曲れる微小毛を密生す。花序は枝の上方の葉及び苞狀に變形せる最上葉とも凡そ、六一八ケの葉腋より生ず、大複總狀花序にして横向又下向す、花序の各分枝は一の穗狀花序にして花の小群塊が交互に着生す；各花小群塊は三ケの無柄花を以て成り、一苞及び二の小苞を有す、中央の花は両性花にして小苞を有せず、甚短小なる柄を有す、側花は雄花にして各一の小苞を具す。

單一種屬にして穗果樹 (*Rhoiptela chiliantha* DIELS & H-MAZT.) と稱し、支那貴州省、廣西省、東京に分布す

本科は果實の形態に於て榆樹科に類似し、材部の内部形態はムクノキ屬に類す、然し羽狀複葉を有し、又胚珠は下垂せず。一般の習性や毛被物は胡桃目に類するが、胡桃目は托葉を欠き、單性花序を有し、胚珠は直生で一室より成る子房底に附着するを以て大に差あり、蓋し一の獨立目 (*Rhoipteleales*) を成すものなり。

オケラ屬 (*Atractylodes* DC.) に就いて

北 村 四 郎

オケラは總苞直下に魚骨狀苞あつて、花色は白に近く、なんとなくカサカサしてゐて茶人の床にはこよなくふさわし草で根はイカリサウに似て太く節しくれ立つてこの形を見ただけでも病氣が治る様なたのもし草で、各々方の御庭に植えられんことを御一考をわすらし度いのである。今度雜報として取り立て申し上げるのも面わゆい次第であるが從來この植物は *Atractylis* 屬に入れられてあつたのがやはり LESSING, De CANDOLLE, 小泉博士の意見に従ひ *Atractylodes* DC. を用ひる考へとなつたので小生の所感を述べる。

オケラ屬の植物が植物分類學上最初に發表されたのは THUNBERG 氏が *Flora Japonica* (1874) p. 306 に *Atractylis ovata* と *Atractylis lancea* とを書いたのがそれで、中井博士 (1928) 小泉博士 (1930) に依れば二記は漢種で我が國栽培の植物に他ならぬのである。上記の如く Thunberg 氏はこれ等の植物を *Atractylis* L の屬に入れたのであるが、*Atractylis* L は *Atractylis cancellata* を *type* とし (cf. BRIQUET, Intern. Rules Bot. Nomencl. ed. III (1935) p. 139) 地中海地方を中心としカナリヤ島からアフガニスタンまであるものでこの屬自身が可成り變異に富むものである。ところがオケラは可成り離れてポツカリと日本と支那とに出るので東亞と地中海地方とは菊科では全く別な地帯に屬しそして連鎖なく兩地帯に出現することは植物地理上の智識は何かものが異なつてゐるのではないかといふ疑をいだかせる。

菊科の著名な専門家 Chr, Fr. LESSING 氏は Synopsis Generum Compositarum (1832) p. 125 に Tribus Mutisiaceae の下に *Atractylis ovata* と *lanca* は恐らくこの族に於ける新屬をなすもので頭花は兩性であるが標品が不完全で正確な研究が出来ぬとある。同氏は *Atractylis cancellata* を *Acarua* WILLD. に入れ *Cynareae* に入れてゐる。

次いで Aug. Pyramo De CANDOLLE 氏が Prodrum VII (1837) p. 48 に Tribus Mutisiaceae の下に non satis notae として *Atractylodes* 新屬? Less. Syn. 125. — *Atractylis* THUNB. fl. jap. 306. — *Acarua* sp. Willd. 頭花兩性とし其の下に *A. lancea*, *A. ovata* が記載文と共に擧げてある。

1873年には George BENTHAM 氏は Genera Plantarum II (1873) p. 466 で *Atractylodes* DC. の記載文を書きこれを *Atractylis* に入れた。もつともこの前に MIQUEL 氏が Ann. Mus. Bot. Lugd. Bat. II (1866) p. 183 で *Atractylodes* を *Atractylis* にして居る。

BENTHAM 氏が *Atractylodes* を *Atractylis* に入れる理由は De CANDOLLE 氏は頭花は兩性なりといふが我々が解剖したところに依れば雄蕊が完全で子房は花後増大してゐるとある。O. HOFFMANN 氏は Pflanzenfamilien IV-5 (1894) p. 317 で BENTHAM 氏の説と同様である。BARONI 氏は白求につき *Giraldia* BARONI in Nuovo Giornal Bot. Italiano, n. s. IV (1897) p. 431. t. 12 なる屬を設けた。

小泉博士は Florae Symbolae Orientali-Asiaticae (1930) p. 12 に *Atractylodes* を採用され各種を明かにされ且つ本屬に新種を加えられ本屬は大いに明白となつて來た。KOMAROV. 及び Alisova 兩氏が Key for the Plants of the Far Eastern Region of the USSR (1932) p. 1058 に *Atractylodes* L. としてあるのは少々トボケタ事であるが著者は De CANDOLLE だし又 *Atractylodes ovata* PHUNBERG. (Tab. 316) とあるのもオカシイが兎に角この本ではそうである。

筆者は徒然なるまゝにオケラの花を解剖したのであるが最初 BENTHAM 氏の見たと如く雄花にぶつかり BENTHAM 氏は偉い人だと何十遍目かの感心を繰り返へしたのであつた。ところが葯下部附屬体を記載しやうと思つて澤山の頭花から小花を集めて解剖したところ雄蕊のない小花がある。少々アワテた次第である。これが動機となつて手下の標品を一箇一箇檢したところ我が國に産するオケラでは正しく兩性で LESSING 氏の云つた通りである。恐らく BENTHAM 氏は材料が少なかつたので偉大なる同氏にも手落ちが出来たのであらうと想像される。其の他雄蕊の葯下部附屬体は短かく sagittate し屢々同一の葯の二つの附屬体がくつゝいて先端は喰ひ切つた如くなり、花盤剛毛は分岐しない。*Atractylis* の葯下部附屬体は sagittate し毛のついた長い

尾となり、花盤の剛毛は分岐するのと比較するに、これはこの兩群の地理的分布上からも兩屬は區別する方がよい様に思われる。

我が國には本屬に *Atractylodes japonica* Koidzumi mss. = *Atractylode lyrata* var. *ternata* KOIDZUMI, Fl. Symbolae Orient.-Asiat. (1930) p. 5. オケラと *Atractylodes koreana* (NAKAI) KITAMURA = *Atractylis koreana* NAKAI in Tokyo Bot. Mag. XLII (1928) p. 478. ショサウジュツとが一般で後者は従來朝鮮にのみ知られてゐたが滿洲大連 (30 jul. 1932 M. KOBAYASHI) 遼陽 (19 aug. 1928 M. NODA) に産する事が知られた。

Atractylodes lyrata SIEB. et ZUCC. は小泉先生のLeiden よりもらつて歸られ標品を拜見したが、これは草本圖説牧野版第十五卷五十二圖版 ホソバナヲケラであつて故松田定久氏が東大植物園より標品にされたものあるきり我が國の野生標品を見たことがない、草本圖説第一版には木曾に産すとあるさうであるが、標品を見ぬ限り支那から傳來したものか又は支那品と本邦のオケラとより作られたものか不明であるが兎に角オケラとは別種である。

抄 録

ハルリス氏：東部グリーンランドの三疊侏羅紀植物化石，第四篇。 (T. M. HARRIS:—The fossil Flora of Scoresby Sound East Greenland, part IV 1935, p. p. 1-176, t. t. 1-29.)

本篇には銀杏類、松柏類、石松類を記せり、松柏類には 13ヶの新屬を設立し、他は各一新屬を設立せり、其内最も吾人の注意をひくは石松類の *Grammaephloios* と云ふ新屬である、本屬は莖枝の厚さ 3.5 cm にもなる大石松であつて *Grammaephloios ichhya* HARRIS と稱す。大石松は元來古生代以外には發見されてゐない事であるのに今侏羅の下部 Liass に大石松の發見されし事は、上部 Rhaetic の大石松子囊穗なる *Lycostrobus* の存在と思ひ合されて、中生代の初め頃にも少許の大石松が存在した事が考へらるゝ。(G. KOIDZUMI.)

STAPF 氏：—石南科の新屬 *Botryostege* (O. STAPF:—*Botryostege*, A New Genus of Ericaceae, in Kew Bull. 191-195, with Pl., Aug. 1934)

先年物故せられた O. STAPF 氏の遺稿で日本特産のミヤマホツツジに對する新しい見解である、氏は此の植物は北米産の *Elliottia* 及び本邦産の *Tripetaleia* とは五全裂する萼片と、苞とが葉狀に成つて居る點で區別さるべきものであるとの意見で